

## 進化倫理学の可能性と限界

矢島 壮平 (Sohei Yajima)

東京大学人文社会系研究科

人間の行動・心理形質は、その身体形質がそうであるように、自然選択による適応進化によって形作られてきたと考えられる。そして、人間の道德と呼ばれる営みは、こうした行動・心理形質なしには成立しえないだろう。したがって、近代イギリスの伝統を汲む、人間の生得的心理形質（人間本性）を重視するタイプの道德哲学・倫理学にとって、進化的説明の導入は必然だと言える。

本発表では、心理形質の進化的説明を取り入れたこのタイプの倫理学、すなわち進化倫理学に何ができ、何ができないのか、その可能性と限界について、それぞれ検討したい。

まず前半は、進化倫理学の可能性を追求する。ヒトを含む複数の動物種に観察される非血縁者間利他行動を説明するという進化生物学上の難問は、トリヴァースの提唱した互惠性理論により一定の解決を見た。そして、アクセルロッド以来のこれまでの互惠性に関する数理研究から進化すると予測される行動形質はいずれも、他個体の行動に応じて自身の行動を変化させる。

このとき、こうした行動形質をもたらす至近メカニズム（心理形質）は必ずしも明確ではない。だが一方で、人間がこうした行動形質を持っている蓋然性があると数理研究は示している。したがって、こうした行動形質の存在を仮定したうえで、それをもたらす心理形質として、現存する人間が実際に持っている心理形質を予測することは、理にかなっているだろう。

ここでは、こうした心理形質として予測されるのが、ある種の感情を含む心理形質のセットであるという仮説を提示したい。そして、こうした仮説が単なる「なぜなに話」に留まらない検証可能性を持つならば、そこに心理形質に関する仮説の提供源としての「進化的説明」の小さくない意義を見出すことができる。

後半は、進化倫理学研究の一つの限界を明らかにすることを目指す。もし進化論的実在論者の目論見がうまくいくなら、道德心理の進化的説明に基づいて、道德規範を演繹により論理的に正当化する可能性が拓けるように思える。そして、こうした道德規範の論理的正当化は、まさに倫理学が待ち焦がれてきたものだ。だが本発表では、仮にこうした正当化が可能だとしても、前半で見る仮説が正しければ、その正当化は行為の動機づけをもたらさず、実践的にはほぼ無意味だと論じたい。

同じことが、進化論的暴露論法についても言える。ジョイスが区別するように、正当化された真なる信念としての道德的知識に対する暴露論法には、大きく分けて、(1) 道德的信念が真であることを否定するものと、(2) 道德的信念が正当化されることを否定するものがある。そして、(1) に基づけば、進化は道德規範が偽であることを明らかにしてくれる。

しかし、やはり前半で見る仮説が正しければ、道德規範が偽であること（あるいは真であること）が明らかになろうとも、そのことが私たちの行為の動機づけに直接影響することはない。したがって、進化論的暴露論法も（論者がそれを意図しているかどうかは別として）実践的な意義を持つとは考えられない。

以上のおり、事実と規範という伝統的な二分法で言えば、進化倫理学は、規範の動機づけにおいてはあまり役立たないかもしれない。だが、道德的事実の説明においては、多大な貢献をなす可能性を有している。